



山見馬茶著
 殺生石後
 月怪談第二
 編
 溪齋英泉画
 上
 映之亭

洋学文庫
 文庫8
 J360



曲亭馬琴著

甲申季秋稿成 巳丑孟春刊行 全四冊上帙

殺生復怪談第二編

この書初編の二巻、三四巻の内が女見むと云ふ竊は初よりありと云ふ自問乃肖像と殺生石ふたむけしより頼家卿と邂逅して寵愛を浴するふ起り上総太郎廣嗣と常夏が寛枉の追放され、銀杏の媪と身を寓せし二免が方人の諛言よりして自害の雷霆の奇特よりしてその亡骸より孺君誕生す此企矢四郎が家僕河鹿弓平途常夏を害して女見一幡と奪ふ夏は終れりしも初編と續けぬ者官の毎編のるる次第を追て求むらん云々希ふの云

溪齋英泉画

江戸馬喰町 山口屋藤兵衛梓

壹

戯作者のつらき筆にやうな女と云ふあり人か果立のうそに終るまめ鳥秋とありるよ群雀の咄々たる笑を拵の中にも雛亦鳥の遊戯知らん結蜘蛛の夫蝨々る争り合壁を唇龍のあどわらん接輿の歌はる筆貝成擔ひ一老夫の伯亦鳥の五噫誰り杵臼の下りも微めんまをよ由てあれを親れば紙屑竹籠ゆも方金あり茂溜の隅も敷甲の折るはよ何らまの隠れ尻を顯してあ申を行ふの小説といひ又草子物語といふ取主人のせざるとうら狂筒子の耽る所作家の祖師と原れは莊氏の寓言釋氏の方便宜買らうとさうと鳥の百轉も知る人を知る人も勸善善懲惡惡をえんとくも人勝る非無理をばけり筆小筆益の殺生石後日怪談第二編あらよと本と合巻の冊子の合の狂言續話並に智賢不繼足とく書肆の謹と塞ぐ耳

文政十二年巳丑春正月新版

曲亭馬琴識





此企能負
妻
其

あつそり乃弓を射
 心象そとのぬれ
 流すのえお強もの身くら
 こそ存のさー
 蓑笠

鍛川
 同九郎



源二位
 頼家卿



あつそり乃
 心象そとのぬれ
 流すのえお強もの身くら
 こそ存のさー
 蓑笠

雷水散人

足立弥九郎
 景盛

愚山人
 おおの夜と桃灯も
 あこがれてゆく
 魂こえる
 らし



銀杏湯
 長濱

若作堂
 やれ
 せ



蚊釘村
 笛輔

宿
 小女郎蜘蛛
 馬おひひま
 のせられ



空蟬



蝮蛇柱六



比企の事言ふ事此企との向やさし中比企の
 方ハいつちよびつ死をのこせしをのめたつ成
 雷公の事言ふ事此企との向やさし中比企の
 東五郎自承の事言ふ事此企との向やさし中比企の
 四郎の事言ふ事此企との向やさし中比企の
 五郎の事言ふ事此企との向やさし中比企の
 六郎の事言ふ事此企との向やさし中比企の
 七郎の事言ふ事此企との向やさし中比企の
 八郎の事言ふ事此企との向やさし中比企の
 九郎の事言ふ事此企との向やさし中比企の
 十郎の事言ふ事此企との向やさし中比企の



汝が怒よめける夜あつらひ死のしる
 めひ田の志ろれ蛇よのゆる

比企判官
 能負

頼鳥齋

仁田四郎
 忠常

